

シュンペーターの経済社会学と資本主義進化

Schumpeter's Economic Sociology and Capitalist Evolution

吉尾博和
YOSHIO Hirokazu

要旨 シュンペーターの『資本主義・社会主義・民主主義』（1942）における資本主義の将来についての予測に関しては、内外にわたって数多くの論評がなされてきた。問題と思われることは、その多くが、「資本主義はまさにその成功により、資本主義に敵対的な社会的雰囲気と諸政策を生み、経済停滞へと衰退の道をたどる」との解釈に終始している点である。これに対してわれわれはシュンペーターの『資本主義・社会主義・民主主義』を理解する場合に重要なことは、この書物を単に経済学者の余技とみなすのではなく、かれの経済社会学体系の集大成の書であると位置付け、この視点から読み解かなければならないということである。そのために本稿では文明論的な広がりをもった、壮大な歴史動学としての『資本主義・社会主義・民主主義』が、それ以前に書かれた『経済発展の理論』（1912）や『景気循環論』（1939）などのかれの経済学や社会学によって構築された経済社会学体系を基礎に構想されているという事実を指摘し、従来の解釈を一部に含んだ新しい解釈を提示する。

1. はじめに

近年、シュンペーターの遺した一連の著作について進化経済学の立場からそのヴィジョンを現代の分析ツールを用いて発展させようとの試みがなされている。その試みの代表として、E.S.アンデルセン(Esben Sloth Andersen)があげられる。彼の著書、*Schumpeter's*

Evolutionary Economics (2009)のなかでアンデルセンはシュンペーターの初期から晩年にいたるまでの主要な著作について、それぞれその進化的ヴィジョンを高く評価している。注目すべきことは、のちに触れるようなわれわれのシュンペーター体系についての理解と同様な体系的理解をアンデルセンが同書で示しているということである。すなわち、われわれはこれまでシュンペーター体系について、これを『経済発展の理論』の社会各領域および全体社会への応用分析の体系として理解してきた。アンデルセンも同様にシュンペーターの『経済発展の理論』の初版の第7章「国民経済の全体像」で述べられた、経済システムの「革新」による内生的進化と他の社会領域とのアナログな進化を「共進化」(co-evolution)と捉え、その全体を「社会進化の一般理論」(a general theory of social evolution) (Andersen:p.8)と呼んでいる。このようなシュンペーターによる社会各領域および全体社会についての構造とその進化的機能についての指摘にもとづいて、アンデルセンは『資本主義・社会主義・民主主義』を「その進化的理論化」(Andersen:p.156)の観点から評価した。のちに述べるように、かれの『資本主義・社会主義・民主主義』についての評価はわれわれの解釈とは異なるが、このアンデルセンの体系的研究は現代の経済学や社会学の進化的アプローチにおけるシュンペーターの再評価に関して、また、われわれのシュンペーターについての「体系的」研究の立場から見て、その代表的事例を物語るもので

ある。

前述のように、シュンペーターの『資本主義・社会主義・民主主義』を理解するためにはかれの社会科学体系の全体像およびその進化的機能を把握することが重要である。なぜなら、同書で展開された資本主義文明の数世紀にわたる変容は、経済をその一部に含む全体的社会についての、それらの相互作用を通じた長期的な変容であり、この社会進化の理論的枠組みをシュンペーターはその初期の著作から晩年の著作にいたるまで準備してきたからである。

2 シュンペーターの経済社会学

われわれはシュンペーターの「経済社会学」(Economic Sociology)をかれの『経済発展の理論』(1912)で述べられた「革新」の理論の社会諸領域の進化および全体社会としての資本主義や封建制度の進化への応用分析と理解する。この理解はアンデルセンを除いて従来の見解と異なる。大野忠男氏は『シュンペーター体系研究』(1971)において、はじめてその「大きな体系」を指摘し、シュンペーター体系の形成過程とその方法を詳述して、かれの経済社会学を「与件の理論」と呼んだ。塩野谷祐一氏は『シュンペーター的思考』(1995)で、シュンペーターの経済社会学を「理論と歴史の総合の試みとしての制度論」と捉え、これを道具主義の方法論の観点から評価した。社会学者のスウェドバーク(Richard Swedberg)はシュンペーターの伝記 *Joseph A. Schumpeter, His Life and Work* (1991) を著し、その中の1章で彼の「経済社会学」について論じている。ただし、スウェドバークの立場は、20世紀初頭の「方法論争」を克復すべく「社会経済学」の概念によって経済理論、経済史、経済社会学を包括することを提唱したマックス・ウェーバーの側にたつものであり、シュンペーターを「社会経済学」の枠組みの中で理解しようとするものである。

以上のように、シュンペーターの体系的研究についての先行的な取り組みおよび主要な貢献は、わが国の大野忠男、塩野谷祐一両氏の研究やスウェドバークの研究に見られるように、シュンペーターの方法や方法論の解明に重点が置かれていた。その結果として、シュンペーター自身の貢献である「内生的進化のヴィジョン」やかれの「発展の理論」の独自性についての評価が後退したとの感が否めない。

そこで本稿ではこれを踏まえて、シュンペーターが自身の貢献である内生的進化の理論としての「発展の理論」を、シュンペーターの個々の著作はもとより、体系全体についての構成原理として用いているとの立場に立ち、これをかれの経済社会学と呼ぶ。

1) 均衡論の積極的な役割

シュンペーターは処女作『理論経済学の本質と主要内容』(1908)において当時台頭しつつあった新古典派による市場の静学分析の本質とその限界を指摘した。新古典派の静学分析は与件としての人口、貯蓄、技術などを一定とした場合、経済主体としての家計や企業による経済合理的行動を通じて、財や生産要素の均衡価格と均衡数量を決定し、最適な資源の配分を達成する。

周知のように市場の静学分析の経済学史的な進展は、F. ケネーの『経済表』による自律的な経済循環の発見に始まり、パレートを経て、ワルラスの一般均衡論によって確立された。ワルラスによる経済諸量の相互依存関係についての論理的自足性の証明についてシュンペーターは以下のように高く評価した。

「このこと（論理的自足性）の証明は経済理論の対象が混沌ではなくて秩序（a cosmos）であるということを確認することによって、独立の学問としての経済理論のマグマ・カルタである」（1939, I, p.41, 邦訳 I 58 頁。）（括弧内筆者。）

すなわち、この論理的自足性の証明は、研究者によって構想された経済領域の自律的メカニズムが他の社会諸領域とは独立に作用することを意味し、経済領域の自律性と経済学の独立とを証明したのである。

シュンペーターは『経済発展の理論』（1912）の第1章および『景気循環論』の第2章でいずれもこの均衡論から均衡破壊としての革新の議論を始めている。その理由は経済体系に与えられるさまざまな外的および内的な与件の変化に対して、これを吸収しこれに適応的に反応するメカニズムとしての役割を均衡論が演じるからである。秩序の破壊（均衡破壊）は秩序への復位（均衡化）を前提とするのであって、革新による均衡破壊現象としての好況局面は、それによって生じたさまざまな不均衡現象を吸収する市場の均衡化メカニズムを意味する整理過程としての後退局面をへて新たな均衡へ到達する。すなわち、

「変動を引き起こすものは、外部から体系にぶちあたる個別的な衝撃であるかもしれないし、体系自体が生みだした特別な変化過程であるかもしれないが、どちらの場合にも均衡理論は体系が反応するにあたって従うべき規則のもっとも簡単なものを提供するものである。均衡理論は反応装置の記述だというのは、このことである。」（1939, I, p.68, 邦訳 99 頁。）

さらに、シュンペーターはこの「反応装置」としての均衡理論について現実の経済現象との関連からその積極的な意義を指摘する。

「経済体系には均衡状態に向かって移動する現実的な傾向があるか、ないかということこそ、われわれにとって重要なのである。すなわち、この（均衡）概念が景気循環分析の用具として有用であるとするなら、経済体系は攪乱されたときにはいつでも均衡をとりもどそうと努めなければならない。」（括弧内筆者）（*Ibid.* I, p.47, 邦訳 66 頁。）

「常識は、均衡をうちたてたりとりもどしたりするこの機構が、経済学の純粹論理の訓練として工夫されたそらごとではなく、われわれの周囲の現実の中に実際にはたらいっているものだということをわれわれに告げる。」（*Ibid.* I, p.47, 邦訳 67 頁。）

このような「現実の中に実際にはたらいっている」均衡へ向けての人々の生き残りをかけた努力こそが経済領域における組織としての秩序の維持と均衡状態への復位を支えているとのシュンペーターによる認識は、均衡理論のかれの経済社会学体系におけるはたらきにとって重要な意味をもっている。

のちに述べるように、シュンペーターは社会の各領域の分析に対して、『経済発展の理論』において示した発展のメカニズムをアナログスに適用している。革新的指導者による革新的行動が従来の秩序を破壊して、この破壊への適応行動がその領域の秩序の再編成を引き起こし、新秩序を形成する。このメカニズムを『資本主義・社会主義・民主主義』における資本主義進化の阻害要因の分析に応用した場合、資本主義の成功によって生み出されたひとびとの功利主義的信念体系の短期的な視野とこれによって支配された「労働主義的資本主義」における過度の平等政策や社会保障政策などの反資本主義的諸政策の「行き過ぎ」を是正する根拠として、「現実の中に実際にはたらいっている」均衡への適応行動が考えられる。すなわち、社会領域の1つであるひとびとの価値観の領域への市場経済の領域からの

「合理化」の絶えざる作用は「信念体系」を長期的に個人主義的、功利主義的なものへと変容させてきた。この傾向の行き過ぎは短期的なものの見方と利己主義へと導く。このような「社会的雰囲気」に支配された資本主義の経済システムは停滞的なものとなろう。しかし、この一時的な停滞は、アメリカの80年代の労働運動に見られたように、ストライキによるサボタージュだけでは結局、所得分配のパイを減少させるのみであるとの反省を生み「信念体系」の新事態への新たな適応をもたらした。

このような文明の進化にとっての阻害傾向の是正のメカニズムとしてシュンペーターによって発展の土台として位置づけられた均衡理論は、のちに述べるように、全体社会へと拡大された壮大な一般均衡モデルのなかで積極的な役割を担うのである。

2) 全体社会システムの進化の構想

シュンペーターは『経済発展の理論』の初版の第7章「国民経済の全体像」で、経済をはじめとする社会の各諸領域の自律的な進化とそれらの相互作用が生みだす全体社会的な進化の構想を述べた。

かれが想定する経済以外の社会の諸領域とは「たとえば、政治、芸術、科学、社交生活、道徳観などの領域である。」(1912,S.536,邦訳 390 頁。) これらの社会領域が他の社会領域から判然と区別される根拠としては以下のごとくである。

「われわれが区別する諸領域に対して、現実にもまた一般的にも、相互に異なった人間集団が対応している。」(Ibid.S.537,邦訳 391 頁。) また、「その領域を自己の主たる活動の場とする人々がいる」(Ibid.S.536,邦訳 390 頁。)

これらの各社会領域には、それぞれその領域に固有の価値基準が備わっており、その基準に従って秩序が形成されている。この場合、各領域の与件の変化に対する均衡へのメカニズムは「経済発展の理論」において述べられた経済静学の方法(市場の静学分析)が用いられる。

「われわれの論じたいアナロジーは次の点である。社会生活のあらゆる領域は、任意の時点において一定の与件の影響下に置かれており、静態的考察法によって、与件が任意の時点における経済の状態を決定するのと類似している。この認識こそは、人間事象の科学的把握にとって曙光を意味するものであった。」(Ibid.SS.537-538,邦訳 392 頁。)

また、各社会領域の自律的発展の分析については経済発展の図式が類比的に用いられる。「われわれがさしあたり経済の領域について述べたことと他の社会生活領域における事象との間には、さらにもう一つのアナロジーが存在する。それは発展のメカニズム、すなわち、社会生活のどの領域にも特有である、相対的に独立的な発展のメカニズムに関するものである。」(Ibid.S.542,邦訳 396 頁。)

この場合、「相対的に独立的な発展」が示すようにシュンペーターは社会各領域の間に「相対的な独立性」(eine relative Selbständigkeit)および、「相対的自律性」(eine relative Autonomie)(1926,S.90,邦訳 164 頁。)を想定している。

さらに、かれはこれらの社会各領域間の「一般的相互依存の体系」を構想し、この全体社会モデルを「社会的文化」と名づけて、これに対し静態的考察法と発展の考察法を適用する。

「すべての個々の領域にこのような相対的独立性があるにもかかわらず、任意の時点に

における任意の領域の任意の要素が、任意の他の領域の任意の要素との間にある関係をもつという一大真理、すなわち、あらゆる領域のあらゆる状態が相互に規定しあい相互に従属するという一大真理が存在するのはなぜか。これらの諸領域の総体を一国の社会的文化と呼び、その発展の総体を社会的文化発展と呼ぶならば、われわれは次のように問うことができる。任意の時点における一国の社会的文化が一つの統一体であり、任意の国民の社会的文化発展がつねにひとつの統一的傾向をもつということは、われわれの考察法にしたがえば、どのように説明されるであろうか。」(1912.SS.545-546,邦訳 400 頁。)

シュンペーターはまず、この社会的文化を静態的考察法で分析し、これを「文化水準の静態的統一性」の認識と呼んだ。

さらに、かれは発展の考察法をこの一国の社会的文化の発展に応用する。この段階では各社会領域の「革新」を通じた内生的変化はそれぞれの領域の与件の変化を通じて相互に作用しあう。すなわち、「こうして、任意の社会活動分野における業績は、ついには社会生活の全領域に対して影響を及ぼすのであり、すべての領域における人間行動の前提と条件とを変更するのである。……このようにして、相対的独立性をもつ諸発展が共同作用する結果、十分な遠方から眺めれば、ひとつの統一的な文化発展と見えるものが、成立するのである。」(Ibid.SS.547,邦訳 402 頁。)

このようにまず、シュンペーターは経済領域における静態と動態という2つの経済的現象にたいして静学（均衡論）とそれを土台として動学（発展の理論）を構築した。つぎにかれはこのサブシステムとしての経済領域についての発展の理論を他の領域のサブシステムにもアナログ的に適用して分析する。そのうえで、これらの相対的に独立性をもつサブシステム間に壮大な「一般的相互依存」の関係を想定し、さらに、この一国の「社会的文化」の全体システムは、資本主義の時代においては進化の主導領域である経済領域からの非経済の諸領域への絶えざる作用とこれらの非経済諸領域からの反作用を通じて、経済領域における「革新」を通じた従来秩序の再編成のメカニズムのように、本来の資本主義秩序から「何か別のもの」へと進化してゆくのである。

資本主義進化についてのこのような全体社会についての理論的枠組みに特徴的なことは、経済サブシステムの構造である「一般的相互依存」の体系とその体系の「革新」による内生的進化のメカニズムが、そのまま相似の形で資本主義の全体システムの構造とその進化のメカニズムに適応されていると思われることである。シュンペーターは資本主義の全体システムの内発的な進化を、資本主義制度の「内在的進化」(immanent evolution) (1954:p.439, 邦訳第3巻 925-26 頁。)と呼び、このビジョンの先行者としてマルクスをあげたが、われわれはこのビジョンをシュンペーターが、フラクタルとも呼びうるような、サブシステムと全体システムとの相似的な構造と機能をすでに構想し「社会進化の一般理論」としてかれの体系を築いていたことに留意しなければならない。¹

3) 『景気循環論』の重要性

¹ アンデルセンは、シュンペーターの「社会進化の一般理論」について述べているが、発展の理論を他の社会領域の分析に応用する段階にとどまっており、全体システムへの相似的な分析の応用には言及していない。(Andersen:pp.155-87)

すでに述べたように、シュンペーターは1912年の『経済発展の理論』初版の第7章「国民経済の全体像」において発展の一般理論について構想した。この『経済発展の理論』は27年の歳月を費やして理論編を拡充し、歴史分析と統計分析を加えて、『景気循環論』（1939）に結実した。経済領域の発展の理論化を社会諸領域および全体社会の発展の分析へと応用するシュンペーターの経済社会学を解明する場合、『景気循環論』において完成された経済領域の進化のメカニズムを考察することはきわめて重要である。

『景気循環論』の第4章「経済発展の輪郭」においてシュンペーターはかれの革新モデルを示した。ここでかれは3段階に分けて現実経済の変動現象にアプローチする。まず、最初の段階では、革新の要因のみが経済体系に作用する場合の景気変動を取り上げるが、これは「純粋モデル」と呼ばれる。純粋という意味は革新による2次的反作用を捨象しているということであり、革新の作用である変動の純粋経済論理が抽出されることになる。

第2段階は革新の作用に対する予想、投機などの反作用を組み入れたモデルとして示される。この革新の反作用から生じた変動をかれは2次波と名づける。この2次波は革新モデルにとっては2次的、付随的な現象とされるが、現実経済への影響から見ると量的に革新から生じる1次波を凌駕する規模をもち、現実への接近度をより高める。

第3段階では、周期の異なる3つのサイクルを合成した「3循環図式」が導入されより現実へ接近する。

（1）1次接近（2局面循環）

革新による景気循環の説明は一般均衡状態あるいは定常状態から始められる。ここではすべての企業の収入と支出は等しく、利子率はゼロで非自発的な失業はない。すべての企業と家計は長期の均衡状態にある。

革新は企業者による新生産関数の導入を意味し、それは新人による新企業の設立という形をとる。革新のための資金は銀行の信用創造によって融資される。最初の企業者が革新に成功すると、多くの企業者群がこれに追随して銀行から融資を受け生産財を購入する。膨張した貨幣量は生産財価格のみならず、消費財価格の上昇をもたらす、好況局面の一般的特徴である物価上昇を示す。

先頭の企業者はやがて革新利潤の中から銀行借入金の返済を始め、後続の企業者も同様の行動を取り始めるとともに、借入金の返済と市場への新商品の流入は増大する。増加する新商品の価格は下落し、増発された貨幣量は収縮する。景気は後退局面へ入る。この局面が一般化するに従って、新生産関数は平準化し、利潤も利子率もゼロに近づく。経済過程はふたたび定常状態へと近づく。ただし、この段階では最初の定常状態にくらべて総産出量は増大し、価格水準は下落しているのである。このような好況と後退の2つの局面から構成される景気循環は2局面循環モデルと呼ばれる。

（2）2次接近（4局面循環）

革新により生じた1次波によって誘発された、付随的な予想、投機などの心理的諸現象がもたらすのが2次波である。革新による新投資の増大は、消費需要の増大をもたらす。この需要の増大は1次波で述べたように限りがあるが、これを過大に予想する楽観的心理や誤謬の心理が投機活動を誘発する。これが革新活動から推測されるよりも価格水準を数倍にも上昇させる。

2次波は1次波によって誘発されたものであるから、1次波が反転すれば2次波もこれ

に追従する。この時点で2次波がもたらした誤謬、投機の結果生じた過剰設備、過剰ストック、過剰雇用は整理の対象となるが、これが過度の悲観的心理作用を生みだし、後退局面をはるかに超えて不況の局面へと景気を押し下げる。やがて、行き過ぎの清算が進むにつれて景気は回復局面へと入る。これが好況、後退、不況、回復からなる4局面循環モデルである。

純粋モデルでは革新により生じた好況局面とこれへの適応過程としての後退局面の2局面が指摘された。投機活動によって引き起こされた「行き過ぎ」としての不況局面は、革新の純粋モデルから見ると不要である。すなわち、

「後退と（もし不況が起こるなら）回復とは経済進化の循環過程の必要部分であるが、不況そのものはそうではない。……循環過程は、そのすべての本質的な様相にわたって、不況がなくとも論理的には完全なものであろう。不況がおこるかおこらないかは事実問題であり、財界や公衆の気分や機嫌、一攫千金的な精神の支配、好況期の信用のとりあつかわれ方——手がたいか、そうでないか——、事業計画の良否についての意見を形成する公衆の能力、好況の高原という言葉への信頼におぼれている程度、貨幣管理の奇蹟などのような偶然的な事情にかかっている。」（傍点筆者）（1939: I, p.150 邦訳 221 頁。）

したがって、シュンペーターは、過度の信用膨張、投機活動などの「偶然的なでき事」によって生じた不況局面を、「正常な過程」としての「生理過程内における病理的なでき事」(pathological incidents in a physiological process)(*Ibid.*:p.162 邦訳 238-39 頁。)とみなしたのである。

われわれの議論にとって重要なことは、純粋に革新のみの作用を示す、好況、後退からなる2局面モデル（1次波）によって誘発された、楽観的心理や投機などの付随的、偶然的な要因がもたらす2次波における不況局面は、健全な景気過程としての「生理過程」にとっては非本質的な「病理現象」であるとかが述べられる点である。

のちに述べるように、シュンペーターは資本主義進化の正常な過程としての「生理過程」とこれを阻害する「病理現象」とを明らかに区別している。このようなかれの経済社会学に対する理解の欠如が、多くのシュンペーター理解にとって、この「病理現象」による経済停滞が『資本主義・社会主義・民主主義』におけるかれの本旨であるとの誤解をもたらす原因となっている。

（3） 3次接近（3循環図式）

1次接近および2次接近のモデルにおいては、1つの革新によって生みだされた単一循環変動を仮定した。しかし、現実には革新の規模は異なり、その懐妊期間やその普及過程も異なる。たとえば、鉄道化の革新は一挙に普及したのではなく、鉄道網の完成はいくつかの循環期間に分けられている。最初にある一定の路線が建設され、これにより生じた変動作用の経済体系による吸収をまって、つぎの路線の建設がはじまるというように進められた。このような大革新は、中小の革新がいくつかの段階に分かれて組み合わさったものと考えられる。これに対し、小革新は比較的短期で終わる。

このような革新の実態を踏まえて、シュンペーターはいくつかの循環の複合モデルとして3循環図式を採用した。それは40ヶ月周期のキッチン循環、約10年周期のジュグラー循環、約55年周期のコンドラチェフ循環を合成したものである。この場合1つのコンドラチ

エフ長波は6つのジュグラー中波を含み、1つのジュグラー波は3つのキチン循環を含んでいる。

われわれの観点である、シュンペーターの経済社会学から見て重要なことは、およそ50年の周期をもつコンドラチェフ長波の導入が、「強度に制度的な性格」をもつ資本主義の長期的な制度変化の分析を可能とするということである。すなわち、「不平等と家族財産の文明」としての「競争的資本主義」を支える私有財産制度や契約の自由の制度が、資本主義のまさにその「成功」によって変容し、平等と家族財産の社会化を志向する別の文明へと進化する、長期的な文明の進化の理論的枠組みを可能とするのである。

3. 資本主義進化の生理過程と病理現象

シュンペーターの生涯にわたる研究テーマである、「資本主義秩序の将来の問題」(Schneider:S.44)の解明のために、かれは初期の著作から主著『景気循環論』にいたるまで自身の経済社会学体系を築きあげ、これらを駆使して『資本主義・社会主義・民主主義』(1942)において資本主義の動態的な進化を描きあげた。シュンペーター生誕百年(1983)を契機にして、『資本主義・社会主義・民主主義』についての論評が数多くなされ、これ以降も時に応じて散発的に評価がなされている。

問題は、これらの論評の多くが、シュンペーターの資本主義進化についての命題「資本主義はその成功のゆえに社会主義化する」を、資本主義はその経済的成功により、経済活動を阻害する経済外的な諸要因を生み出し、経済停滞に陥るとシュンペーターが主張したのだから、彼は「資本主義は成功を伴う失敗のゆえに滅びる」(Smithies:p.137,邦訳234頁。)と一面的に解釈していることにある。

この解釈では、資本主義の進化の経路が結局は経済停滞としての資本主義の失敗へと一つの可能性しか認められていない。これに対してわれわれの解釈では、のちに述べるごとく、まず、シュンペーターが資本主義の進化過程を社会化への数世紀にわたる長期的、本質的な「生理過程」と、偶然的な外的要因(戦争・恐慌)によって生じた、短期的、一時的な(数十年の)経済停滞を意味する「病理現象」とを区別しているという点が大きく異なる。(図1)

この区別がほとんどの論者によってなされていない。われわれの経済社会学の立場からすると、景気循環における革新により生じた1次波(生理過程)とこれによって誘発される、予想、投機などの随伴的現象からもたらされる2次波(病理現象)との区別は、資本主義の社会進化にも応用され、体制進化の「生理過程」と「病理現象」との区別を可能とするのである。このようなシュンペーターによる体制進化の経済社会学についての視点の欠如が多くの論者の誤解の源泉になっていると思われる。²

² シュンペーターの資本主義論についての解釈は、ほとんどが上記の失敗論あるいは停滞論である。その停滞論の本旨についてみると大きく2つに分類される。第1は、資本主義の経済領域内では革新の自動化が経済進化を推し進めるが、経済外の領域において、労働組合の急進化およびこれに伴う過度の平等化政策などの、経済進化の阻害要因が顕在化して資本主義を経済停滞に陥らせるというものである。代表的な論者としては以下のごとくである。E.S.アンデルセン (Andersen,E.S.:2009,pp.155-187)、A.スミシーズ (Smithies,A:1981,pp.130-149、邦訳223-254頁。)、R.L.ハイルブローナー

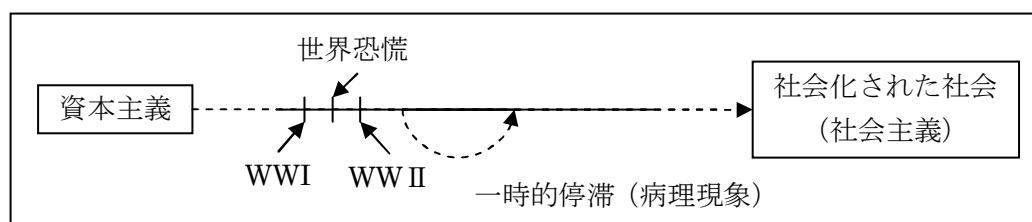


図1 社会進化の長期的・生理過程

以下では、このような資本主義進化の経路についての区別にもとづいて、これをシュンペーターの叙述に沿って検討して行く。

周知のごとく、シュンペーターの述べる資本主義は歴史的制度的特徴をもっており、それは市場機構や私有財産制度や銀行による信用創造などの経済制度とならんで、政治体制、社会の階級構造、さらには、「不平等」や「家族財産」を容認するか否かについての価値観、生活様式までを含んだ一個の文明である。かれは資本主義の典型を十九世紀のビクトリア王朝時代の英国にもとめ、これを「無傷な資本主義」(Intact Capitalism)あるいは「競争的資本主義」(Competitive Capitalism)と呼んだ。かれによると、資本主義の経済発展は、経済を含む社会の各領域における長期的な変容をもたらし、「事物と精神」の「社会化」、「合理化」が進展する。すなわち、資本主義には「社会主義の技術的・組織的・産業的・心理的前提条件が一步一步満たされていく傾きがある。」(1942:p.219,邦訳 405 頁。)あるいは、私が強調せんと欲するのは、ただわれわれがすでに自由放任の資本主義の原理からはるか遠く離れたところまできているという事実や、さらにまた私的企業の運用を真正の社会主義的計画と異ならないような仕方に条件づけるように資本主義的諸制度を展開しかつ統御することが可能であるという、いっそう進んだ事実にはほかならない。」(Ibid.:pp.418-19 邦訳 795 頁。)

ただし、注意すべきことは「資本主義過程に内在する社会主義への発展は、ゆるやかなテンポで行なわれる」(Ibid.:p.220 邦訳 405 頁。)ということである。

歴史上、「世界恐慌」や「大戦争」が、この本来ゆるやかな社会変化をしばしば加速した。「無傷な資本主義」の段階までは、これらの「加速度因子」は戦勝国において支配階級の威信や当時の制度的な構造を強化する方向に作用したが、「トラスト化された資本主義」(Trustified Capitalism)といわれる二十世紀の段階では私的企業体制に対する政界の態度の根本的変化と労働者の急進化をもたらしたのである。シュンペーターは、これについて「社

(Heilbroner,R.L.:1981,pp.95-106、邦訳 163-182 頁。)、大野忠男(大野:1971、5、6 章、1983、1984)、塩野谷祐一(塩野谷:1983、1984、1995、297 頁。)

第2の分類に属する解釈は、経済外の領域における阻害要因のほかに経済領域内にも進化の阻害要因をみるものである。大企業化にともなう組織の硬直化や革新の自動化、組織化を企業者機能の低下因子ととらえ、内的、外的阻害要因による矛盾のゆえに資本主義は社会主義化する。M.ブロンフェンブレナー(Bronfenbrenner,M:1982,pp.95-112)、篠原三代平(篠原:1984)、A.ヒアチェ(Heertje,A:1982,pp.84-94,2006,pp.41-56)、K.ロスチャイルド(Rothchild,K.W:1982,pp.113-115)、G.ヴィンターベルガー(Winterberger,G:1983)。

会主義への進化は、これらの事件がない場合には、いっそう緩慢ではあるが、しかしまたより着実なものであろう。進化の逆転や手に余る状態の出現は、その見込みがいっそう小さいであろう。国民生活のさまざまな分野における発展の調整は、より完全なものとなるう」(Ibid.:p.421 邦訳 800 頁。)と指摘している。³すなわち、シュンペーターは資本主義の経済発展により生じた各領域における変容傾向がこれらに適応するための十分な時間をともなった場合の社会進化を本旨としており、これを「秩序ある進歩 (orderly progress)、および場合によっては景気循環政策の多くの問題を解くとともに、ついには社会主義体制への移行の問題をも解くはずの発展」(Ibid.:p.387 邦訳 736 頁。)と述べている。したがって、シュンペーターは、この「秩序ある進歩」を本質的過程として、「資本主義のわく内における漸進的社会化 (gradual socialization) が単に可能であるばかりでなく、予期されるもっとも明白な事柄でさえある」(Ibid.:p.227 邦訳 420 頁。) (傍点原著者) と主張したのである。すなわち、われわれの解釈では、経済停滞を意味する資本主義の失敗がシュンペーターの真意とはならず、「秩序のある進歩」を遂げつつの「漸進的社会化」こそが、かれのいう本質的な資本主義進化の「生理過程」となるのである。

ところで、『資本主義・社会主義・民主主義』をかれが執筆しつつあった、その当時の時代状況に目を向ける必要がある。というのは、同書の序文において、かれは「社会主義は現在の戦争 (第二次大戦) の結果ただちに現実問題化しようとしている実践的命題である」(Ibid.:p. X I V 邦訳 41 頁。) (傍点原著者) と指摘し、戦後の急激な社会主義化熱の盛りあがり、急進化した労働組合運動をつうじた過度の平等化政策 (反資本主義政策) をうみだして、資本主義進化の内的論理に即した本来的な「生理過程」からの逸脱へと導き、一時的な経済停滞の可能性をもたらすと懸念したからである。かれの言葉を引用するならば、「いま私のいわんとするのは、かくのごとき広範かつ急激な社会的舞台の変革は、当然一時的には生産実績に影響するというだけであり、……」(Ibid.:p.64 邦訳 119 頁。) また、「長期的に見た情勢はますます社会主義者の野望に有利に展開している。(これは数世紀にわたる社会化の「生理過程」を意味すると考えられる。) けれどもいっそう重要なことは、資本家階層やその機関の一時的な活動停止に誘発されて絶好の機会が到来するような短期の情勢が発生するかもしれないということである。—— 一九一八年、一九年のドイツ情勢はよい実例である。ある人はまた一九三二年のアメリカの情勢をあげるかもしれない。」(Ibid.:pp.223-24 邦訳 413 頁。) (括弧内筆者)

すなわち、シュンペーターはかれの資本主義進化の「生理過程」モデルにとっては外的な「加速度因子」(世界恐慌・大戦争) が誘発した「病理現象」が「秩序ある進歩」を妨げて、一時的・短期的な (おそらく数年から数十年) 経済停滞をもたらす可能性をもつと憂慮したのである。一九三十年代以降の著作にはとくにこの「病理現象」が強調されており、『資本主義・社会主義・民主主義』だけをさながら主要な論評の対象とした場合、往々に

³ この引用においてシュンペーターが構想する全体社会モデルの機能が読み取れる。かれは社会諸領域によって構成される総体を、各サブシステム間の一般的相互依存体系とみなし、この中の主導的な経済サブシステムによる非経済のサブシステムへの作用とこれらの非経済のサブシステムによるこの作用への適応、さらには非経済のサブシステムによる反作用と経済システムによるこれへの適応による全体システムの進化を想定している。

して、経済停滞をかれの結論と理解しがちである。

ともあれ、シュンペーターが同書で展開した内容の論旨は二つあり、上記の見地からこれを理解することが重要であるが、それは「資本主義体制には自己崩壊に向かう傾向が内在すること、そしてそれは初期の段階では進歩を阻止する傾向という形をとって現れるということ、これである。」(Ibid.:p.162 邦訳 295 頁。) ただし、注意すべきことは自己崩壊の意味であり、「資本主義過程はそれ自身の制度的枠組を破壊するのみならず、また他の枠組のための諸条件をもつくり出す。したがって破壊という言葉はやはり適当な言葉とはいえない。私は転形 (transformation) として語ったほうがよかったかもしれない。……すなわち、物事と精神とがますます社会主義的生活様式に従いやすいように変形されていくのである。」(Ibid.)

このような「資本主義の枠内における漸進的社会化」の長期的な諸傾向は資本主義の経済エンジンによって生みだされる内在的な傾向である。

1) 資本主義進化の生理過程

資本主義の進化に内在する、長期的な社会化傾向を社会の各領域における諸傾向についてみた場合、シュンペーターによると、これは「合理化、平等化 (leveling)、機械化 (mechanizing)、および民主化」(1939 :II, p.697 邦訳 1030 頁。) の各傾向である。仮に社会の各領域を文化、社会、経済、政治の四つに分けるとすると、上記の各傾向はこれらに対応すると考えられる。

論文「資本主義」(1946)において、彼はこれらの主要な四つの傾向について要約的に論じ、これらの観察された諸傾向が、「完全にはたらきつくすことを許されたなら」、資本主義から社会主義への長期的傾向があり、これが「科学的予測」であるとのべる。(1946:p.203 邦訳 36-37 頁。)

(1)「資本主義の時代が経過するにつれ、企業者の個人的リーダーシップが重要性を失い、ますます、大会社の内部におけるお雇いの専門家たちの機械化されたチームワークに取って代られる傾きをもつこと」

第一は経済領域における傾向であり、ここでの重要な契機は上述の4つの内の「機械化」である。「競争的資本主義」から「トラスト化された資本主義」への資本主義の進化は、競争的淘汰を意味する「創造的破壊」の過程により、産業の合理的再編成を果たしつつ、企業の大規模化の傾向をもつ。この大企業化に伴い、経済発展の担い手としての個人的企業者によって遂行された革新機能が専門家集団へと移り、革新そのものが「日常業務」と化し、予測、計算され、「自動機械化」(automatized)されるのである。また、この大企業化の傾向は、所有と経営の分離を通じて、ブルジョアジーの経済基盤を消失させることにより、旧来のブルジョアの「家族財産」を存続不可能とし、所得の「不平等」の原因を取り除く。

この経済領域の進化傾向について注意すべきは、革新の担い手の個人から組織への交替を意味する「企業者機能の無用化」についての解釈である。シュンペーターはこの「無用化」(obsolescence)によって革新が衰退するとはみていない。この点の考察は『資本主義・社会主義・民主主義』の第12章「くずれ落ちる城壁」の第1節「企業者機能の無用化」に詳しい。ここでかれは、まず第1に、欲望飽和や生産方法が改善しつつかれた状態は「非現実的」としながらも、その状態の下では静態的な状態が生じて利潤や利子率が零に近づ

き、ブルジョア階級が消滅する。そして産業の管理は日常業務と化し、その職員は官僚の性格をおびる。そして、きわめて無理のない型の社会主義がほとんど自動的に出現すると
のべる。

つぎにかれはこの非現実的な過程をはずし、「企業者機能を主導因とした経済過程が委縮することなく進行した」(1942:p.132 邦訳 239 頁。) 場合、すなわち革新過程がその勢いを失うことなく持続した場合を考察する。資本主義の上昇期(競争的資本主義)においては、革新は慣行の軌道を乗り越えることであり、それにとまなう周囲の抵抗を克服することを意味したが、現在では革新が日常化し、「進歩そのものは予測され」、「正確に計算されうる」ようになり、「一群の専門家の仕事」となりつつある。また、社会環境が「経済変化に慣れ」、「抵抗を示さなくなる」のである。

「かくて、経済進歩は、非人格化され、自動化される傾きがある。官庁や委員会の仕事が個人の活動にとって代らんとする傾向がある」(Ibid. :p.133 邦訳 240 頁。)

以上のように、「トラスト化」段階の資本主義経済では革新は自動化され、したがって経済発展も自動化されるのであり、革新過程の委縮は生じないのである。

(2)「資本主義の構造を擁護していた制度や伝統が減びていく傾きをもつこと」

第二は、社会領域における傾向であり、ここでの重要な契機は上述の「平等化」に対応する。これは、その最盛期において確立された資本主義を支える「経済的不平等」の構造の擁護制度としての「私有財産制度」と「契約の自由の制度」の形骸化傾向であり、その理由は、これらの制度を支持してきた貴族階級・ブルジョアジー等の衰退に求められる。

(3)「資本主義過程はまさにその成功により、これに敵意をいだく集団の経済的・政治的地位を高める傾きをもつこと」

第三は政治領域に属し、「民主化」の傾向をもつ。資本主義の経済的成功は、人口の大多数を占める「新中産階級」(「サラリーマン階級」)を生み出し、また、選挙権をあらゆる階級の手の中へともたらすことにより、経済的平等への手段と「民主主義」(政治的平等)とを
実現した。このサラリーマン階級は、「大・中ブルジョアジーの利益に敵意をもっている」
(1939:II,p.698 邦訳 1031 頁。) のである。

(4)「また資本主義的階層自体、主として家族生活のきずなの衰退——それは資本主義過程の<合理化的>影響に帰せられるであろう——によって、以前にそれがもっていた動機づけの図式の支配力や役割をいく分か失う傾きをもつこと」

第四は文化領域の傾向であり、前述の「合理化」にあたる。シュンペーターによれば、資本主義は、経済活動のもつ合理的傾向を加速し、合理的なものの見方を助長した。これが「精神の合理化」の傾向である。このような傾向は企業経営者の「短期的」な視野を説明するとともに、広義の労働者(サラリーマン階層を含む)階級の労働組合を通じた種々の平等化政策、福祉政策をも説明する。ただし、上記の「以前にそれがもっていた動機づけの図式」(莫大な利潤への動機)は、官僚化され、所得が平等化した社会においては、別の動機図式——「社会的表彰や社会的名声」(1942:p.208 邦訳 382 頁。) などとこれに付随した特権——が有効性をもつとかれが述べる点は注意されねばならない。

以上のような各領域における諸傾向は、これらが完全に作用したならば、一方において経済過程の中央管理の可能性と経済的平等が実現した、無階級社会への物的条件をもたら
し、他方、平等化社会にふさわしい精神的態度を生み出す。さらに、これらの条件が満た

されること以外にも、社会主義社会が十分に機能するためには二つの条件が必要とされる。それは「資本の飽和」と「人口数の本質的恒常性」（1919:S.472 邦訳 120 頁。）である。これは資本の飽和状態においてはじめて、経済は静態化して、「企業者機能の無用化」が完了し、経済の日常的管理を可能とするが、この産出量が不変の経済は人口数の一定を前提とせねばならないからである。シュンペーターによれば、これらの条件はいずれも資本主義がその内部から達成するのである。

ただし、注意すべきことは、かれが現実には欲望飽和が「飛んでいる的」（1942:p.131 邦訳 237 頁。）のようなものであり、技術的可能性は「海図に載っていない海」（*Ibid.* :p.118 邦訳 213 頁。）と指摘する点である。これは、欲望飽和が実現するような「霞のかかった遠い未来」までは経済発展が続く、あるいは、続かなくては社会主義が十分に機能するための条件が整わないということを意味している。またかれは、これらの条件が満たされた「極限の場合」においても、「資本主義秩序はそれ自らの力だけでは社会主義秩序に転化しないであろう」（*Ibid.*:p.220 邦訳 407 頁。）と述べ、「憲法改正」による社会主義政権の誕生はシュンペーターの資本主義進化の「生理過程」の図式からは導かれずとしている。

1) 病理現象

シュンペーターは一九三十年代以降の著作において、資本主義の「秩序ある進歩」にわたるの阻害傾向を問題にしはじめた。かれによると、二度の世界大戦と世界恐慌とが、本来ゆっくりとした社会化の過程を急激に加速し、その結果として、第一次大戦後にヨーロッパで、世界恐慌と第二次大戦後にアメリカで労働者が急進化して、政界の態度・政策が急激に変化した、労働組合の政治力を行使した労働者達の要求は過度のものであり、これを反映した政策も、転形過程における安全の範囲を超えるものとなったのである。このような資本主義をかれは「労働主義的資本主義」と名づけ、その典型をイギリスにみたが、今やそれがアメリカをも脅かしつつあり、これがアメリカ経済を一時的な停滞へと追い込むのではないかと懸念したのである。これについて『景気循環論』で彼は以下のごとく述べる。すなわち、「資本主義はそのたんなるはたらきからして、それに敵対的な社会的雰囲気——読者が好むなら、道徳的慣例——を生み出すのであり、この雰囲気が今度は、資本主義が機能することを許さない諸政策を生み出している。この雰囲気あるいはこれらの政策が、時節が到来すると——すなわち、資本主義的過程が実際その力を使いつくしてしまうか、あるいは使いつくしつつあるときに——一般的となるような仕方発展する、ということを保証する均衡化装置はなにもない。それらがより早く一般的となるときにはいつでも、資本主義もその可能な代替物も作用することのできない状況を意味する行きづまりの危険をもたらす。これは、おそらくいまだ永久的にではないという程度において、アメリカで起こったことである。」（1939:Ⅱ,p.1038 邦訳 1156-57 頁。）（傍点筆者）

この引用においては、秩序ある進化過程としての資本主義進化の長期的な「生理過程」と「病理現象」とが明確に区別されている点に注意されたい。

さらに『資本主義・社会主義・民主主義』の最終章（一九四七年に加筆）において、かれはアメリカの膨大な生産可能性についての短期的予測を述べている。すなわち、「われわれは、産業過程それ自身の内部には、その実現を阻止するようないかなる原因も存在しな

いということを見てきた。われわれはまたあるいはその実現を阻止するかもしれない原因が産業の外部には存在するということもみてきた。……それは単に合衆国においてのみならず、世界における社会情勢の支配的な要因となるであろう。しかし、そうなるのは単に次の半世紀ぐらいのことにすぎない。本書において展開された長期の診断がこれによって影響されることはないであろう。」(1942:p.398 邦訳 757 頁。) (傍点筆者)

この場合の「長期の診断」とは資本主義転形の「生理過程」を意味し、外的阻害要因は急進化した労働者階級によりもたらされた、当時の転形段階にとっては尚早な、過度の課税や統制政策等である。かれはこの「病理現象」が当時より約半世紀にわたってその爪痕を欧米社会に残すと予測したのである。

ここでわれわれにとって重要なことは、この引用においてシュンペーターが、アメリカの膨大な生産可能性を阻害する要因の作用が「単に次の半世紀ぐらいのことにすぎない」とのべ、これを克服して長期的な資本主義進化が続くと断言するのはどのような根拠によるのかということである。われわれの解釈では、急進化したひとびとの信念体系（社会的雰囲気）を背景とした労働組合による過度の反資本主義的平等化政策は、全体システムの中の非経済的各サブシステムである。2 度の世界大戦と世界恐慌という加速度因子によってゆがめられたこれらのサブシステムは、それぞれ「相対的自律性」をもっており、外からの衝撃に「創造的に反応」することが可能である。おそらくサブシステムとしての信念体系の自律的反転は、科学の長期波動をかれが想定したとの事実を踏まえると(吉尾:2008)、コンドラチェフ長波の周期である約 50 年を要するとかれが考えたと解釈できる。

事実、アメリカ経済は 70 年代から 80 年代にかけて「労働主義」による先進国病に悩み、「アメリカの世紀は終わった」(都留重人)とまで云われたが、この労働主義的「信念体系」を自省、克復する形で乗り越え、90 年代に入り情報通信、バイオ・テクノロジーなどを中核とした「革新」により復活を遂げたことは記憶に新しい。

4. おわりに

事物の内在的論理にもとづいて、数世紀にわたる社会進化の「生理過程」をその論理に即した、本質的な過程とみなし、偶然的なでき事により誘発される、一時的「病理現象」をこれと区別した、以上のようなシュンペーターの「理論づけられた歴史」のモデルからは、少なくとも経済停滞が必然となり、そのゆえに社会主義化するとの解釈は導かれない。歴史上資本主義は幾多の「病理現象」にみまわれ、その失敗の経験こそが正常な経路への梃子（「状況の論理」）として作用してきたのである。

かれによると、現代は転形の「過渡的状态」にあり、「資本の飽和」が実現する「霞のかかった遠い未来」をむかえるためには、現代の資本主義は「まず完全にその仕事を果たさねばならない」。(1924:S.523 邦訳 196 頁。) とかく、「病理現象」の影響にかくされ、社会進化の底流としての「生理過程」は見失われがちである。われわれはここに文明の円滑な進化にとって、その本質的要素と非本質的要素とを明確に区別したシュンペーターの壮大な体系のもつ現代的意義を見い出さねばならない。

参考文献

日本語文献

- (1)大野忠男 1971.『シュムペーター体系研究』創文社。
- (2)——— 1983 「シュムペーターと資本主義の将来」『追手門経済論集』17.2・3
- (3)——— 1984 「シュムペーターの未来学について」『資本主義の運命・経済社会学会年報・VI』時潮社。
- (4)——— 1994.『自由・公正・市場』創文社。
- (5)塩野谷祐一 1984.「シュンペーターにおける科学とイデオロギー」『三田学会雑誌』76.6.
- (6)——— 1984a.「シュンペーターの問題と方法—方法序説」『経済学研究』25.
- (7)——— 1984b.『価値理念の構造』東洋経済新報社。
- (8)——— 1984c 「資本主義文明の衰退と社会主義」『シュムペーター再発見』日本評論社。
- (9)——— 1986.「シュンペーターと純粋経済学」『経済学研究』27.
- (10)——— 1988.「シュンペーター・シュモラー・ウェーバー 歴史認識の方法論」『一橋論叢』100.6.
- (11)——— 1990.「シュンペーターの『アンナの日記』—一橋大学社会科学古典資料センター、Study Series No.21.
- (12)——— 1995.『シュンペーター的思考』東洋経済新報社。
- (13)篠原三代平 1984.「シュンペーターと現代世界」『ヒューマノミクス序説』筑摩書房。
- (14)吉尾博和 2008.「シュンペーターの総合的社会科学と科学進化—発展の一般理論の応用—」『秀明大学紀要』第5号。

外国語文献

- (15)Andersen, Esben Sloth 2009. *Schumpeter's Evolutionary Economics : A Theoretical, Historical and Statistical Analysis of the Engine of Capitalism*, London, New York, Anthem Press
- (16)Bronfenbrenner, M. 1981. "Schumpeter's Contribution to the Study of Comparative Economic System," In H. Frisch, ed. 1981.
- (17)Frisch, Helmut, ed. 1981. *Schumpeterian Economics*. London: Praeger.
- (18)Heertje, Arnold, ed. 1981. *Schumpeter's Vision: Capitalism Socialism and Democracy after 40 years*. New York: Praeger. (西部邁他訳『シュンペーターのヴィジョン』ホルト・サウンダース, 1983)
- (19)——— 1981. "Schumpeter's Model of the Decay of Capitalism," In H. Frisch, ed. 1981.
- (20)——— 2006. *Schumpeter on the Economics of Innovation and the Development of Capitalism*, Cheltenham, Edward Elgar
- (21)Heilbroner, R.L. 1981. "Was Schumpeter Right," In A. Heertje, ed. 1981.
- (22)——— 1993, *21st Century Capitalism*, New York, London, W.W. Norton & Company.
中村達也・吉田利子訳『二十世紀の資本主義』、ダイヤモンド社、1994。
- (23)Rothchild, K.W. 1981. "Schumpeter and Socialism," In H. Frisch, ed. 1981.
- (24)Schneider, Erich. 1970. *Joseph A. Schumpeter, Leben und Werk eines Grossen Sozialökonomen*, Tübingen, J.B.C. Mohr.

- (25) Schumpeter, Joseph Alois. 1908. *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*, Leipzig: Duncker & Humblot. (大野忠男・木村健康・安井琢磨訳『理論経済学の本質と主要内容』2冊、岩波書店、1983-84)
- (26) ———— 1912. *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, Leipzig: Duncker & Humblot. (第7章のみ: 佐瀬昌盛訳「国民経済の全体像」玉野井芳郎監訳『社会科学の過去と未来』ダイヤモンド社、1972)
- (27) ———— 1919. “Sozialistische Möglichkeiten von heute,” *Archiv für Sozialwissenschaft*, Vol. XL VI, reprinted in Schumpeter 1952. (大野忠男訳『今日における社会主義の可能性』創文社、1977に所収。)
- (28) ———— 1924. “Der Sozialismus in England und bei uns,” *Österreichischer Volkswirt*, Reprinted in Schumpeter 1952. (大野忠男訳『今日における社会主義の可能性』創文社、1977に所収。)
- (29) ———— 1926. *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung : Eine Untersuchung über Unternehmerrgewinn, Kapital, Zins und der Konjunkturzyklus*. 2nd. revised ed. Leipzig: Duncker & Humblot. (塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳『経済発展の理論』2冊、岩波書店、1977)
- (30) ———— 1926. a. “Gustav v. Schumollar und die Probleme von heute,” *Schumollars Jahrbuch* 50: 337-88. Reprinted in Schumpeter 1954 (中村友太郎・島岡光一訳「歴史と理論 シュモラーと今日の問題」玉野井芳郎監訳『社会科学の過去と未来』ダイヤモンド社、1972)
- (31) ———— 1939. *Business Cycles: A Theoretical, Historical, Statistical Analysis of the Capitalist Process*, 2 vols. New York: MacGraw-Hill. (吉田昇三監修『景気循環論』5冊、有斐閣、1958/64)
- (32) ———— 1942. *Capitalism, Socialism and Democracy*. (2nd ed. 1947, 3rd ed. 1950). New York: Harper & Brothers. (中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』3冊、東洋経済新報社、1951/52)
- (33) ———— 1946. “Capitalism,” *Encyclopaedia Britannica*, vol. IV, Reprinted in Schumpeter 1951. (大野忠男訳『今日における社会主義の可能性』に所収。)
- (34) ———— 1950. “The March into Socialism,” *American Economic Review*, Vol. XL, reprinted in *Capitalism, Socialism and Democracy*, 3ed. この論文の邦訳は上掲書に所収。
- (35) ———— 1951. *Essays of J. A. Schumpeter*, ed. By R.V. Clemence. Cambridge, Mass.: Addison-Wesley Press.
- (36) ———— 1952. *Aufsätze zur ökonomischen Theorie*, ed. by E. Schneider and A. Spiethoff, Tübingen, J.C.B. Mohr.
- (37) ———— 1954. *History of Economic Analysis*, New York: Oxford University Press. (東畑精一訳『経済分析の歴史』7冊、岩波書店、1955/62)
- (38) Smithies, A. 1981. “Schumpeter’s Predictions,” in *Schumpeter’s Vision*.
- (39) Swedberg, Richard 1991. *Joseph A. Schumpeter, His Life and Work*, Cambridge, Polity Press.
- (40) Winterberger, G. 1983. *Über Schumpeters Geschichtsdeterminismus*, Tübingen, J.C. B. Mohr.